

古書古人 (3)

落葉社

桑原伸介

明治二十八年九月二十一日、二十六歳の私は七十歳の父を奉じて大阪から東京に着いた、と堺利彦はその自伝に書いた。この年の春、母を亡なつた利彦は大阪を引き払い老父を伴なつて、前年東京に移つていた兄欠伸のもとに一家合流したわけである。兄弟ともども大阪時代から引續いての新聞記者仲間との交友が始まつた。利彦の筆を借りれば、つまり一つの友人団体であり、社交俱樂部であつた、落葉社は一つの文芸団体であつた、あるいはむしろ一つの俳句会であつた、折折集會して皆がフザけながら俳句を作つていた、しかし必ずしもそれが主眼ではなかつた、と書いている、時は清国という大國を相手の初めての対外戦争にうち勝ち、日本の資本主義が上げ汐に乗ろうという時代である。新聞もまた一昔前の政論新聞から營利本位の時代に入ったといわれる。読者維持のためには興味ある紙面を用意せねばならない。そのためルビを振つたり挿絵を入れたり、あるいは一篇ないし二篇の小説・講談の連載が欠かせない条件になつた。

こうした舞台裏にこれらの雑報・小説の筆をとつた文士兼新聞記者の存在があつた。落葉社同人は、つまりそうした記者の一群なわけである。随時同人宅に集い寄つては海苔一帖酒一升に飲を呼び、発句や歌仙をヒネリあつた。その折折の集會記や作品が朝野新聞と東京新聞に掲載されている。ただし同一名では營利上面白くなくなるというわけが、枯川は由分子、蹴月は二木子、天涯は田子というふうになを變えている。常連の中で一二判然しない人がいるが、簡単に紹介すれば、小林蹴月、加藤眠柳はともにめざまし新聞改題して東京新聞、堀紫山は読売、永島永洲、杉田天涯ともに朝野、兄の本吉欠伸は都、弟の枯川堺利彦また実業新聞の記者であり、そして眠雲とあるは兄弟の老父堺得司である。

落葉社漫吟 東京新聞 明治二十八年十二月十八日
落葉社は心を以て交わるものなり、句の爲めに集るものにあらず、其の漫りに吟ずる所、必ずしも絶調たらんを期せず。只同人諷詠の間、おのずから情筆の備わるを覚ゆるのみ。

山茶花や空家の壁は落ちにけり

我みても翁の頭巾小十年

独居てひとつ千鳥を聞く夜哉

山茶花や襦袢のかかる裏長家

蹴月

枯川

眠雲

天涯

荒海に星あき夜や啼く千鳥

眠柳

何やらの模様か浪に磯千鳥

春曙

小按摩に借さばや夜の投頭巾

紫山

落葉社漫録 朝野新聞 明治二十八年十二月二十七日

俳句第二小集。この夜月いと黒く、風は屋角に吠え、やがてはらはらと檐端を叩く時雨なり、田子と豁然子と相對して火桶を擁し、夜も寒きに同人のよく集い来べきやなど打語ろう。やがてがらり戸を蹴放たんばかりに入り来れるは由分子、続いて屈子、巴月子。おお寒しとまらず火桶を奪う。米子、二木子また至りぬ。一座すべて七人なり。例の一升の酒はすでにその三分を傾け、二帖の海苔また四五分をや噛み尽されけん。(以下略)

落葉社漫吟 東京新聞 明治二十九年一月十六日

忙裏閑を欲し、索居友を思ふは人心自然の經濟なり。同人多く貧にして、衣食に役役たり。雁魚往復の便ありと雖も、炉辺燈下、相会し相語り、世のおかしきこと、はかなきことどもをうらなく云い慰むべき時の稀なるを憾む。第三小集は去る十一日の夜、銀座眠柳庵に開かれき、同人みな和氣を帯び、桜花なきも一室已に春なり。況んや酒あり肴あるに於いておや。

折折は馬士の折りゆく野梅哉

天涯

霜解けや日のさす縁や鉢の梅

枯川

川下の水も香るか岸の梅

眠柳

梅の下硯に酒を分かちけり

蹴月

藪入や母に教ゆる京言葉

欠伸

庇から落ちたらしいぞ猫の恋

眠柳

落葉社漫吟 東京新聞 明治二十九年一月二十三日

落葉社第四小集を新富街蹴月庵に開き、課題を眠柳に選ばしむ。眠柳蹴月の「発句初学び」を繕き、紙衣、手鞠、水鳥と定む。拙速を以て称されたる天涯は筆をとつて忽ち一句、忽ちにして二句……。遅吟を以て称されたる紫山は柱に倚りて悠悠茶を喫し、塩煎餅を噛り、しきりに例の諧謔を弄して衆をして苦吟するの閑なからしめんとす。天涯と共に拙速二幅対を称されたる欠伸は天涯と両兩相對して既に數句を認めぬ。鳴かば人を驚かさんとみだりに筆をとらざる枯川また紙と筆とを呼べり。紫山ここに於いてか、独り太息していわく、僕もし姓を遅塚とせば号を拙堂に改めんかなと。衆ために哄然。臍を曲げ横臥して眉をひそめ天涯と欠伸の早吟を冷笑する蹴月あり、時に格子戸はかつ然と響きぬ。衆われに返り謂えらく、永洲の後れて来れるならんと。あたかもよし杯盤は来れり。雑談は再び潮のごとく湧き出でぬ。出詠の句は清書されたり。枯川杯を放ち反覆朗誦す。衆或るいは感じてこれを買ひ、或るいは嘲つてこれを退け、或る

いは失笑して其出詠者を反問す。

小さき手にヤツと持ちたる手鞠哉

母親に吟わせてつく手鞠哉

関取を禿のなぶる手まりかな

振袖に入れどころなき手鞠哉

大奥を語る老媪の手まりかな

水鳥や千年の興亡鴻の台

友仙の孫と梅見の紙衣かな

水鳥やあまのさげゆく小徳利

水鳥の一羽ずつ出る土橋かな

鷹揚な話さびしき紙衣かな

其声よ姿よ節よ手まりつき

歌仙行 東京新聞 明治二十九年四月一日

ことし衣更月の初め、浜町なる紫庵を訪れて枯川と俳

諧歌仙表六句を興行し、また水無庵を訪ねて眠雲翁と裏

十二句を催せり。その後名残の巻を添えて一卷たらしめ

んと欲し、おなじ月の末の八日、新富町眠雲翁の庵を訪

いけるに、此日の午前、翁人と碁を囲み、勝敗を争うの

際、脳出血を發して卒然倒れ、人事不省、其夜ついに逝

き給えり。翁が生前の友二三に語りて、この歌仙を一巻

とし責めてもの心やりとしつ。

加藤米司(眠柳)識

枯川

欠伸

蹴月

眠柳

枯川

眠柳

紫山

紫山

天涯

枯川

永洲

永洲

日永にふえる遊び友達

勘右工門と長左工門とが海苔干して

捨てた碇に浪のかぶさる

面白や笛も聞えて望の月

風は吹ても虫は啼くなり

水枯れた川を隔てて代官地

今日も丁稚は叱られて居る

美濃行の状を向うる飯食うて

南無阿弥陀仏口を離れぬ

霜柱たちてきらく朝ぼらけ

水車の音の遠く聞える

峠まで上れば丁度月の澄む

萩と桔梗は今が活け頃

東京の団九郎も来て秋芝居

飛白の着初め鳥居潜りぬ

(以下略)

眠柳

川

柳

眠雲

眠柳

雲

柳

雲

柳

柳

雲

柳

雲

柳

落葉社の中心であった利彦は、前年十月に創刊したばかりの実業新聞がつぶれ(のち再刊)浪人であった。その利彦が新たに福岡日日新聞に職を得て九州へ去ると、

自然落葉社は立ち消えたようである。才華を謳われた兄

欠伸が結核で死んだのはこの翌年である。三十三歳であ

った。(くわばら・のぶすけ・法律政治課憲政資料室主査)